

# 序章

## 21人の軍師たちの 略歴と背景

この講座で取り上げる軍師たちの  
具体的なエピソードから学ぶ前に、  
それぞれの軍師たちが  
どのような状況において活躍したのか、  
まずはその人物、背景をみておきましょう。

おお た どうかん  
太田道灌

たいげんせつさい  
太原雪斎

こまい こうはくさい  
駒井高白斎

やまもとかんすけ  
山本勘助

つのくませきそう  
角隈石宗

たちばなどうせつ  
立花道雪

かわ だ よしあき  
川田義朗

こ ばやかわたかかけ  
小早川隆景

てんかい  
天海

あんこくじ えけい  
安国寺恵瓊

ほん だ まさのぶ  
本多正信

なべしまなおしげ  
鍋島直茂

とよとみひでなが  
豊臣秀長

たけなかはん べ え  
竹中半兵衛

やまなしかのすけ  
山中鹿介

くろ だ かん べ え  
黒田官兵衛

かたくらかげつな  
片倉景綱

なお え かねつぐ  
直江兼続

しま さ こん  
島左近

い い なおまさ  
井伊直政

ほん だ まさずみ  
本多正純

※名前に関しては、別の名がある人もいますが、本講座では、上記の名を用いています。

# 軍師たちの略歴

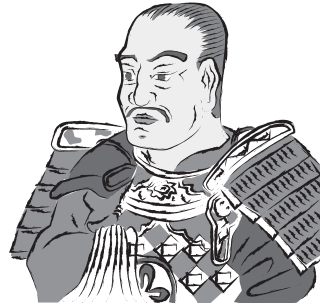
基本、生年順。ただし、生年不詳の者もあるので、誤差があります。

おおた どうかん すけなが  
太田道灌 (資長)

えいきょう ぶんめい  
永享4年(1432)～文明18年(1486)

おしがやうえすぎさだまさ  
主人・主家 扇谷上杉定正

軍師タイプ 戦術・戦略担当軍師



扇谷上杉氏の家宰太田資清の子で、幼名は鶴千代、のち資長と改名。入道して道灌と号した。幼いときから、鎌倉五山で学んでいた。

家督を継いだ道灌は、康正2年(1456)江戸城築城に着手し、江戸城は長禄元年(1457)に完成。ついで、河越城、岩付(槻)

城の築城も行っている。今川氏の内紛を鎮圧するために駿河に出陣、また上杉顕定の家臣、長尾景春の乱を鎮圧するなど、武将としても優れていた。学者としても一流という定評があった。文明18年(1486)、主君である上杉定正に謀殺された。

たいげんせっさい そうふ きゅうえいしやうぎく  
太原雪斎 (崇孚、九英承菊)

めいおう こうじ  
明応5年(1496)～弘治元年(1555)

よしもと  
主人・主家 今川義元

軍師タイプ 外交型軍師



いまがわうじちか いはら さ えもんじしやうまさもり  
今川氏親の重臣庵原左衛門尉政盛の子。幼くして出家し、駿河国富士郡の善得寺、京都の建仁寺で修行した。

今川氏親から仕えるよう要請され、氏親の五男・芳菊丸(のちの梶岳承芳、義元)の教育係になる。ともに建仁寺、妙心寺で修業したのち、雪斎は善得寺に戻る。駿府臨濟寺の住持として、宗教的な影響力を

持っていただけでなく、義元に軍師として迎えられている。雪斎自ら大将となって三河に出陣し、織田信長の父信秀の軍勢と戦ってもいる。

今川氏の執政、軍師としての役割を担い、政治・軍事・外交、すべてにおいて義元を補佐した。

こま い こうはくさい まさたけ  
駒井高白齋 (政武)

? ~天文 22 年 (1553)?

主人・主家 武田信玄

軍師タイプ 軍配者型軍師



武田信虎・晴信（信玄）期の武田家用務日誌を基に成立したとされる『高白齋記』の原本の作者と考えられている人物。この『高白齋記』は、明応 7 年（1498）から天文 22 年（1553）にいたる 56 年の記録だが、信玄の時代のことを研究する上で、評価の高いものとなっている。

高白齋は、気象を吉兆占いに使うという

よりも、気象観測をもとに実戦に生かす軍師であったという。

また、実戦に出るよりは、信玄の身近にいたと思われ、合戦での功名はあまり多くない。そのかわり、信玄の使者として、今川氏、北条氏、上杉氏との講和（三方輪）に尽力している。

やまもとかんすけ  
山本勘助

? ~永禄 4 年 (1561)

主人・主家 武田信玄

軍師タイプ 軍配者型軍師



『甲陽軍鑑』によると、三河牛窪の出身とされているが、駿河の国富士郡山本との説もある。「力は強いが色黒で容貌は醜く、隻眼で片足は不自由、手足の指先にも疾患があった」とされている。四国、九州、中国、関東と長く歩き、兵法修行をしてまわったという。

今川に仕官しようとしたがかなわず、天

文 12 年（1543）、信玄の家臣の中でも両職という重職についていた板垣信方の口添えもあり、武田信玄が高い評価で召し抱えたとされている。

永禄 4 年（1561）、第 4 次川中島の合戦で、「啄木鳥の戦法」を使ったが、上杉方に見破られ、不利な戦況の中、戦死した。

つのかませきそう  
角隈石宗

?～天正6年(1578)

主人・主家 大友義鑑よしあき、大友宗麟そうりん

軍師タイプ 軍配者型軍師



豊後国の大友宗麟に軍配者として仕えたが、出自などはわかっていない。

天文19年(1550)の菊池義武よしたけの反乱による肥後国攻めや豊前国平定軍に参加。

天正6年(1578)、薩摩国の島津氏を

討伐しようとする宗麟をいさめたが、宗麟は石宗の諫言を聞かずに出陣する。このため石宗は、死の覚悟を決めて出陣、耳川の戦いで戦死した。

たちばなどうせつ べつきあきつら  
立花道雪(戸次鑑連)

永正10年(1513)～天正13年(1585)

主人・主家 大友義鑑よしあき、宗麟そうりん、義統よしむね

軍師タイプ 参謀型軍師



豊後国守護大名大友氏の一門戸次親家べつきちかえの次男として生まれた。14歳で父と死別し家督を継いだ。大友家中核的な存在となり、白杵鑑速うすきあきは(すむ)・吉弘鑑理よしひろあきまさとともに3宿老に数えられ、大友義鑑・宗麟(義鎮)、義統の3代に仕え、大友氏の全盛期を支えた。

北九州各地を転戦し、その勇猛さは諸国に知られた。落雷により重傷を負い、歩行が困難となったのちは、輿こしの上から采配をふるったという。二階崩れの変とよばれる家督争いの際に、宗麟の側につき勝利したことで、家臣の筆頭的な存在となった。

かわだ よしあき  
**川田義朗**

?～文禄4年(1595)

主人・主家 島津よしひさ義久

軍師タイプ 軍配者型軍師



島津氏の家臣。川田家12代当主。島津氏の信頼も厚かった比志島ひしじま義貞の子として生まれ、川田義秀の養子となる。

天正4年(1576)、島津軍が日向伊東氏の高原城を攻めた際に軍配者をつとめ、落城後、小林城にて戦勝祝賀が催された際

には勝鬨かちどきを上げる奏者もつとめている。また、同6年(1578)の耳川の戦いに勝利した際にも同様に勝鬨を上げる奏者をつとめた。また、天正12年(1584)の沖田おきた噺なわての戦いの際には、気をよむなど、軍配者型軍師として活躍している。

こばやかわたかかけ  
**小早川隆景**

てんぶん 天文2年(1533)～けいちゆう 慶長2年(1597)

主人・主家 毛利もとなり元就、豊臣秀吉

軍師タイプ 参謀型軍師



毛利元就の三男。母は、兄・吉川元春と同じ。安芸あき(広島県)の竹原小早川家の養子となり、のちに沼田ぬた小早川家も継ぎ、両家を統合。

兄の吉川元春とともに毛利両川として毛利氏の発展に尽くした。天正10年(1582)、中国攻めの豊臣秀吉と和議を結

んだ。毛利水軍の指揮官としても活躍。豊臣政権下では豊臣秀吉の信任を受け、五大老の一人に任じられた。

実子はなく、秀吉の正室おねの兄・木下いへさだ家定の5男で秀吉の養子となっていた羽柴ひでとし秀俊ひであき(小早川秀秋)を養子として迎え、家督を譲っている。

てんかい なんこうぼう  
天海 (南光坊)

天文5年(1536)～寛永20年(1643)

主人・主家 徳川家康、秀忠、家光

軍師タイプ 外交型軍師



陸奥国高田の出身という。<sup>ひえいざん</sup>比叡山で学び、同山復興に尽くし、天台宗中興の祖とされる。

関ヶ原の戦い後、徳川家康に認められ、江戸幕府の宗教政策を中心に家康、秀忠、家光の幕政に参画していった。軍配者型、参謀型軍師としての働きもしている。

川越喜多院、日光山輪王寺を再興。家康

の死に際しては、仏教と神道を融合した山<sup>さん</sup>の<sup>ういちじつしんどう</sup>王一実神道を主張し、東照大権現の詔勅を受け、家康の遺骨を駿府の久能山より日光に移し祀った。

さらに江戸城の鬼門にあたる上野に寛永<sup>かんえい</sup>寺を開く。寛永20年(1643)10月2日に死去し、108歳であった。号は南光坊。諡号は慈眼大師。法名は別に随風ともいう。

あんこくじ えけい  
安国寺恵瓊

?～慶長5年(1600)

主人・主家 毛利輝元、豊臣秀吉

軍師タイプ 外交型軍師



東福寺の末寺の安芸安国寺住持、竺雲慧<sup>じくうんえ</sup>心に師事。安芸安国寺住持などをへて、慶長3年(1598)に東福寺の住持、慶長5年(1600)には南禅寺住持となる。

この間、外交僧として備中高松城水攻め

後の講和交渉にあたるなど、活躍をみせる。秀吉の信任を得て大名の待遇をうけ、朝鮮出兵にも従軍。関ヶ原の戦いでは西軍に属して敗れ、慶長5年10月1日京都六条河原で処刑されている。

ほんだまさのぶ  
本多正信

天文7年(1538)～元和2年(1616)

主人・主家 徳川家康

軍師タイプ 官僚型軍師



三河国で生まれ、幼少期から徳川家康に仕える。しかし、三河一向一揆に加担して出奔しゅっぽん。のち帰参し、家康の側近となる。政治的、行政的手腕を認められ、家康からの信頼が厚かったとされている。

秀吉による小田原攻めののち、関東に

入った家康にしたがった。関東入国後は相模さがみ(神奈川県)玉縄たまなわ1万石をあたえられ、大名となる。

家康が隠居したのちは、徳川秀忠を補佐し、幕政を担う。方広寺鐘銘事件おおくぼただちか、忠隣失脚事件を演出したともいわれる。

なべしまなおしげ  
鍋島直茂

天文7年(1538)～元和4年(1618)

主人・主家 りゅうぞう し たかのぶ まさいえ  
龍造寺隆信、政家

軍師タイプ 参謀型軍師



肥前・龍造寺氏きよふさの家臣、鍋島清房の次男。龍造寺隆信に仕える。

龍造寺隆信けいざんの母慶間が、清房の後妻に入ったことで、直茂と隆信は義兄弟となり、強固な関係を築いた。

大友宗麟ちかさだの一族大友親貞が肥前に進出してきた際、17歳の直茂はわずかな兵力で親貞を討ち、その能力を発揮した。天

正12年(1584)島津氏との沖田畷おきたなわての戦いで隆信が戦没したのち、隆信の嫡子まさ・政家いえの後見としての立場で龍造寺家の実権を握った。文禄・慶長の役では朝鮮に出陣。関ヶ原の戦いでは西軍につき、伏見を攻撃したが、西軍に属した柳川の立花宗茂むねしげを攻め、領国の安堵をはかった。

佐賀藩の藩祖となる。

とよとみひでなが  
**豊臣秀長** (小一郎、ながひで長秀)

天文9年(1540)～天正19年(1591)

主人・主家 豊臣秀吉

軍師タイプ 参謀型軍師



豊臣秀吉の弟。早くから兄・秀吉にしたがった。中国攻めにしたがって頭角をあらわし、但馬竹田・出石城主などとして但馬・播磨経略に努めた。本能寺の変後も秀吉の片腕として、山崎の戦い、賤ヶ岳の戦い、小牧・長久手の戦いに従軍している。

天正13年(1585)には紀州の一揆をしずめている。この功で、紀伊、和泉65

万石を領する。さらに秀吉の名代として長宗我部氏を下した四国攻めでは大役を果たし、大和も加えた100万石を領することになり、大和郡山城を居城とした。

天正18年(1590)の小田原攻めにも参戦したが、病をこじらせ、翌19年に、大和郡山で死去している。

たけなかはん べ え しげはる  
**竹中半兵衛** (重治)

天文13年(1544)～天正7年(1579)

主人・主家 さいとうなつおき 斎藤龍興、浅井長政、  
織田信長、豊臣秀吉

軍師タイプ 戦術・戦略担当軍師



美濃の戦国大名斎藤氏の重臣で、美濃の菩提山城(現・岐阜県垂井町)の城主竹中重元の子。半兵衛の名が有名になったのは、永禄7年(1564)2月、稲葉山城乗っ取り事件である。21歳となっていた半兵衛は、当主斎藤龍興の寵臣たちによるいじめを受けていた。城中の櫓から小便をかけら

れたことで、半兵衛は我慢の限界を感じ、その報復に出る。そして、わずか17名で、稲葉山城乗っ取り劇を演じた。稲葉山城は龍興に返したが、結局は、龍興を見限り、浅井長政に属す。そののち、織田信長に任せ、秀吉の与力となり活躍した。



やまなかしかのすけ ゆきもり  
**山中鹿介 (幸盛)**

天文14年(1545)～天正6年(1578)

主人・主家 あまごよしひさ 尼子義久、かつひさ 勝久

軍師タイプ 参謀型軍師



出雲の生まれ。尼子十勇士の一人に数えられる。

永禄9年(1566)、毛利氏の手によって尼子氏の月山がっさん富田城とだじょうが落ち、尼子義久よしひさが捕えられたことで、尼子氏は滅亡。鹿介は主家再興のために立ち上がり、京都の東福寺に入っていた尼子勝久に決起をうながし

た。一時期は出雲大半を回復したが、元亀元年(1570)、毛利の反撃にあい敗北し京都へ落ち延びた。

その後もあきらめず、羽柴秀吉の中国攻めにしたがいが播磨上月城に勝久とともに入るも、毛利に攻められ落城。勝久は自刃し、鹿介は捕えられ、護送中に殺害された。

くろだかんべえ よしたか じよすい  
**黒田官兵衛 (孝高・如水)**

天文15年(1546)～慶長9年(1604)

主人・主家 こでらまさもと 小寺政職、織田信長、  
豊臣秀吉、秀頼

軍師タイプ 戦術・戦略担当軍師



播磨姫路城主小寺(黒田)職隆の嫡男として姫路城で生まれる。ごちやく御着城主、小寺政職に属し、姫路城を預かった。信長が勢力を伸ばしてきたところで、信長に属し、中国攻めで侵攻してきた秀吉に、姫路城を差し出し、秀吉の側近として仕えた。

天正6年(1577)、反旗を翻した荒木村重の説得のため、摂津有岡城にのりこんだ

が、捕えられ1年余り土牢に幽閉される。

秀吉の軍師として、備中高松城の水攻め、四国・九州攻めでも活躍。豊前を与えられ、中津城を築く。

剃髪して隠居し、如水と名乗り、領国は嫡男・ながまさ長政にまかせ、自身は小田原攻め、朝鮮出兵に従軍している。

福岡藩52万石の礎を築いた。

かたくらかげつな こじゅうろう  
片倉景綱 (小十郎)

弘治3年(1557)～元和元年(1615)

主人・主家 だててるむね まさむね  
伊達輝宗、政宗

軍師タイプ 参謀型軍師



米沢八幡宮の神職・片倉景重の次男として生まれる。

永禄10年(1567)、伊達輝宗の嫡子、政宗が産まれると、景綱の姉・喜多は政宗の乳母を拜命。そののち、景綱は輝宗の徒小姓として仕える。秀才、剛着ぶりが認められ、政宗の近侍となった。

政宗の主要な戦いのほとんどに参戦し、いずれも伊達氏の危難を救っている。小田原攻めに際しては、政宗に豊臣秀吉方につくように述べ、小田原参陣を決意させた。

江戸期に入り、一国一城制のもとで、片倉家は、白石1万3000石の城主として認められている。

なお え かねつぐ  
直江兼続

永禄3年(1560)～元和5年(1619)

主人・主家 上杉景勝

軍師タイプ 参謀型軍師



坂戸城主(新潟県南魚沼市) なが おまさかげ 長尾政景の家臣である樋口兼豊 ひぐちかねとよ の長男として生まれたとされる。幼名は与六、政景の妻仙桃院に見込まれ、景勝の近習になり、春日山城に入る。上杉家の重臣、与板城主直江家を継ぎ、与板城主となった。

慶長3年(1598)、上杉景勝の会津120万石移封に際し、米沢城6万石の城代となる。兼続は、領内の城などを中心に

整備。この動きに家康が再三の上洛の要求をするも、拒んだため、会津討伐の軍が出された。これに呼応して、石田三成が挙兵し、関ヶ原の戦いへ発展した。関ヶ原時には、景勝は徳川家康と敵対したため、上杉家は米沢30万石に減封される。兼続は家宰的立場を維持し、米沢城下の整備・藩政の確立に尽くした。